



現像剤の温度が30~35 程度に下がったら、青い感光面を上にして基板を静かに現像液に入れます。温度計(C-100)で測りながら行う作業がスムーズにできます。露光の終わった感光基板は、外部光線をさけて素速く現像を行います。温度が高いとパターンを溶かしてしまいます。



ピンセット(PIN-6)やワリバシなどで、基板をゆすると、光の当たったところが溶けて銅箔面が現れます。パターンは、青い感光剤の状態です。余分な現像はこのパターンを溶かすので、パターン以外の感光膜が溶けて銅箔になると終了です。現像時間の目安は30秒を目安にします。入れっぱなしするとパターンまで溶けてしまいますので、現像時間はきちっと守ってください。



スプレによる現像



感光基板の現像としては、現像スプレ(DP-303)も使えます。流し台などの壁面に斜めに立て掛け、感光後の基板にスプレをすることで現像をすることができます。スプレ缶を良く振り基板の上から下の方へ洗い流すように吹きかけます。パターン以外の銅箔が現れない現像ムラがある場合は、その部分だけ補充スプレを行います。